様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2005～2008
課題番号：17520502
研究課題名（和文）デンマーク領西インド諸島における奴隷解放についての基礎的研究

研究課題名（英文）A fundamental study on the abolition of slavery in the Danish West Indies

研究代表者
佐保　吉一（SAHO YOSHIKAZU）
東海大学・国際文化学部・教授
研究者番号：00265109

研究成果の概要：
1848 年にデンマーク領西インド諸島で奴隷解放が平和的に実現した背景として次のことが考えられる。既にイギリスの前例があった（1833 年）上に、デンマークでも地方身分制議会の中でも奴隷解放に関する議論が行われていたこと。そして、総督ペーター・フォン・ショルテンが黒人奴隷や自由黒人と一定の信頼関係をもっており、デンマーク国王も将来の奴隷解放には同意をしていたこと。しかし、最大の背景はフォン･ショルテンが奴隷解放に対する情熱を持っていたことだといえよう。

交付額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２００５年度 | 700,000 | 0 | 700,000 |
| ２００６年度 | 500,000 | 0 | 500,000 |
| ２００７年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| ２００８年度 | 200,000 | 60,000 | 260,000 |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 1,900,000 | 210,000 | 2,110,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：カリブ海、デンマーク領西インド、奴隷解放、自由黒人、ペーター・フォン・ショルテン、サンクト・トーマス島、サンクト・クロイース島

１．研究開始当初の背景

日本における北欧史研究は最近盛んになってきたとはいえ、依然未開拓な分野である。その為デンマークが有していた植民地に関しては殆ど研究が着手されていない状態である。確かに日本でも 1990 年代より関心が向けられるようになってきて、拙稿以外に 2 本の論文が発表されているが、内容的には奴隷貿易や奴隷制が中心で、奴隷解放自体を扱ったものは過去に発表した拙稿以外にはない。さらにその 2 本の論文で用いられている史料も英語史料のみでのバランスを欠いたものである。

そこで、デンマーク語文献を用いて、デン

マーク人の陥りやすい懐古的な視点ではなく、また現米領ヴァージン諸島在住者が陥りがちな被害者的な視点ではなく、第３者的立場から客観的な研究を行なうことができる可能性がある。

２．研究の目的

この旧デンマーク領西インド諸島（現米領ヴァージン諸島）における奴隷解放は、同時期の他のカリブ海諸国、例えば仏領マルティニーク島で見られた血なまぐさい解放とは異なり、殆ど無血に近い状態で実現した特徴的なものであった。本研究の目的は、上述した世界史的にも重要な内容を含んだデンマーク領西インド諸島における奴隷解放が、なぜ平和裡に実現したのかという問題意識を中心に据えて、同諸島での黒人奴隷制及び奴隷解放に関して基礎的な研究を行うことである。この研究結果は現在酪農王国、環境大国として世界に名をはせているデンマークが有する歴史的特徴と深く関わっている可能性もあり、本国の歴史的特徴が植民地政府の政策に影響を与えたことを示唆できるかもしれない。

３．研究の方法

**（１）デンマーク領西インド諸島に関する文献目録を作成する。**関西学院大学中央図書館、旧大阪外国語大学付属図書館、北海道東海大学中央図書館所蔵のデンマーク史および北欧史関係雑誌のバックナンバーを基に、基本的な文献目録を作成し、それにインターネットを通して得られる文献情報を適宜加えていった。現地における文献調査の結果も順次追加した。

**（２）デンマーク領西インド諸島に関する基本年表を作成する。**

既に入手済みの次の文献を主に用いてデンマークが西インド諸島に植民地を有していた期間（1671-1917 年）に関する詳細な年表を作成した。 Kai Pedersen: Danmarks historiens Hvornaar skete det, Copenhagen, 1985. Benito Scocozza: Danmarkshistoriens hvem hvad hvornaar, Copenhagen, 1996.

**（３）文献および文献複写の入手**

先に作成した文献目録より必要なデンマーク語文献を順次デンマークにある書店 Erik Paludan 社（コペンハーゲン）及び Aagot Bogimport A.S.（コペンハーゲン）を通じて入手した。英語文献は紀伊国屋書店を通じて入手した。また必要な文献複写（マイクロフィルムを含む）は主にデンマークの国立文書館や王立図書館に依頼して入手した。

**（４）研究史の整理**

文献情報をもとに入手した研究論文・著書を読むと同時に既に入手済みの次の文献をもとに、デンマーク領西インド諸島における奴隷制および奴隷貿易廃止に関するこれまでの研究の整理を行なった。A.R.Highfield and G.F.Tyson: “Slavery in the Danish West Indies - A Bibliography –“, St. Croix (The Virgin Islands Humanities Council), 1994.
Erik Gøbel: A Guide to Sources for the History of the Danish West Indies (US. Virgin Islands), 1671-1917, Odense (University Press of Southern Denmark), 2002.

**（５）現地における文献調査**

これが本研究の特徴の一つである。なぜならデンマーク領西インド諸島関係の史料は、デンマーク本国（王立図書館、国立文書館）、現米領ヴァージン諸島（フォン・ショルテンコレクション、セント・クロイ島公立図書館、ウィム・プランテーション博物館付属図書館）、アメリカ合衆国（ワシントン DC の国立公文書館 College Park）の三ヶ所に散在しているからである。その三ヶ所を実際に訪れて、研究者の視点で史料の状態や量を調査した。許可が得られれば必要に応じて、持参したデジタルカメラで撮影を行った。

**（６）奴隷制自体の内容研究**

デンマーク領西インド諸島の奴隷制自体について検討した。その際、「1733 年の奴隷法 slavelov af 1733」「1755 年の奴隷法 slavelov af 1755」をもとにみていった。その際、奴隷に関する規程、プランターに関する規程に分けて整理した。また、当時の現地新聞 “St. Croix Avis” , “St.Thomas Tidende” の記事（特に投書欄）を追いながら、プランター自身が、この奴隷制に対してどのように考えていたのかも調査した。さらに、他の史料を用いて、プランター側からみた奴隷制について考察した。

**（７）奴隷制廃止過程で公布された法律の考察**

現地のデンマーク人総督ペーター・フォン・ショルテン Peter von Scholten が総督代理になった 1827 年から、総督職を辞す 1848 年（７月）までに現地で出された法令の中から、特に黒人奴隷や自由黒人に関わるものを抽出して、時期と内容を考察した。その際、近隣にイギリス領西インド諸島やフランス領西インド諸島があるため、イギリスやフランス国内での動き（奴隷貿易廃止、奴隷制廃

止）にも留意した。

**（8）自由黒人に関する調査**

本研究においては、奴隷制廃止の前段階における自由黒人の地位や役割に注目している。奴隷がいかなる方法で合法的に自由を得、そしてその後は白人（プランター）や黒人奴隷とどのようにかかわっていくのかを具体的に考察した。奴隷解放を宣言した西インド総督のペーター･フォン･ショルテンもこの自由黒人に対して、官吏に登用したり、軍隊や消防隊に入れたり、その地位向上に尽力している。1801 年に実施された人口調査結果を入手したので、それを自由黒人の基礎データとして、今後も引き続きその考察を進める。黒人が自由を獲得するには、その自由を購入するという方法もあり、それは新聞に告知として掲載されるため、新聞を資料にデータを集めた。さらに、自由黒人に関して出された法令を、時間順で整理し、その特徴を考察することを今後考えている。

４．研究成果

デンマーク領西インド諸島で 1848 年 7 月に、奴隷解放が無血で平和裏に行われた背景には、現時点で以下のことがあったと考えている。

（1）当時、世界で奴隷貿易に関するシェアのトップであったイギリスは、1807 年にまず奴隷貿易を廃止した（実はこれは 1793 年に公布されたデンマークの奴隷貿易廃止勅令に遅れをとっていた)。その後、イギリスでは奴隷制廃止の方向に議論が進み、1833 年には自国植民地における奴隷解放を行った（完全解放は 1838 年)。それゆえ、当時の世界においては大きな先例がすでに存在していたのである。また、特に現イギリス領ヴァージン諸島は、セント・ジョン（サンクト・ヤン）島から至近距離にあるため、イギリスの（政策の）影響はかなり大きい。

（2）1848 年にはヨーロッパ本国では 2 月革命、3 月革命が進行しており、同年３月には近隣のフランス領マルティニーク島及びグァドループ島で奴隷暴動が発生し、現地総督の権限で 5 月には奴隷解放が実現していたことがあげられる。さらに同年 5 月末にはサンクト・トーマス島の東側にあるプエルトリコのスペイン総督プリムが、フォン･ショルテン宛書簡の中で、フランス領の暴動にふれると共に、必要な場合の軍事的援助の提供を申し出ていた。こうしたヨーロッパや近隣の島の状況からみると、デンマーク領西インドにおける白人の間にも、漠然とした将来の不安が広がっていたと思われる。

（3）デンマーク本国でも 1788 年 6 月に、土地に縛られていた農民男子を解放する、土地緊縛制廃止が既に実現していた。さらに 1830 年代後半に、約 200 年ぶりに開催された地方（身分制）議会でも西インド植民地における奴隷解放に関する議論が活発に行われていた。特に 1844 年と 1846 年のロスキレ議会では、グルントヴィー、ダーヴィズ、スコウといった当時の著名な議員がデンマーク領における奴隷制の完全廃止を求める共同提案を行っている。結果は時間の関係で採決に至らなかったり、結論に至らなかったりしたが、最終的には次の議会(1848 年)で、完全なる奴隷制廃止法案を取り扱うよう国王に陳情することが決議されていた。

（4）現地総督ペーター･フォン･ショルテンは総督代理に就任した 1827 年以来、自由黒人に注目し、その数の増加と権利獲得、そして地位向上に尽力した。例えば権利獲得に関しては、1834 年 4 月 18 日勅令により、全ての自由黒人に白人と平等の権利と特権が与えられている。これまで曖昧であった自由黒人の法的地位が、白人と平等になったことはこの上なく意義深い。自由黒人の地位向上に関してフォン･ショルテンは、優秀な自由黒人から役人や副官を登用し、機会があるごとに白人が参加するパーティ等にも自由黒人を夫婦で招待するようにした。また、“Colonial Aide-de-Camp”を任命する際も、一人はデンマーク人（白人）から、もう一人は自由黒人の将校から選んだ。さらに、Free Corps も、名前を換えて The King’s Free Corps あるいはとして The Queen’s Free Corps と権威を持たせた上で、立派な制服を支給し、そこに所属できることの喜びも与えたのであった。

（5）絶対王政時代における歴代のデンマーク国王（フレデリック 6 世、クリスチャン 8 世）もこの問題に関心を持っていたことがあげられる。特にクリスチャン 8 世は完全実施が 1848 年以降になる奴隷解放には同意していた（1847 年 7 月 28 日の勅裁書では、12 年後の奴隷解放が約束されていた)。結局、奴隷解放は時間の問題なのであった。

（6）国王と総督ペーター･フォン･ショルテンの間に個人的な信頼関係が存在したことがあげられる。
デンマークに帰国した際には、国王・王室メンバーと頻繁に面会(audiens hos kongen)している。特にクリスチャン 8 世とはよく会っていた。このことはクリスチャン 8 世の日記からも確認できる。また、奴隷学校創立の際

にも王女より「・・・そのような（黒人のための学校を創るという）適切なあなたの企てにお祝いを述べることは私の大きな喜びです。・・・（この学校の進展は）私の大きな関心事なのです」という書簡を受け取っており、緊密さが分かる。

（７）現地総督ペーター･フォン･ショルテンと自由黒人、および黒人奴隷間に一定の信頼関係があったこと。
　黒人奴隷との関係では　例えば、警察に訴えても満足のいかない黒人奴隷の奴隷主に対する不満を、直接総督にアピールすることを可能かつ奨励した。場合によっては公権力で奴隷を保護する場合もあった。また、黒人奴隷が裁判における証人になれるようにも法改正をおこなっている。
　なお、フォン・ショルテンは奴隷解放宣言を公布した後 1848 年 7 月 14 日に、デンマークへ帰国したが、はやくもその数ヵ月後には、彼を総督として島に戻してほしいという嘆願書が国王宛に出されている。このエピソードからも、フォン・ショルテンが当時の元黒人奴隷たちとの間に一定の信頼関係を築いていたことがわかる。

（８）自由黒人と黒人奴隷間、さらに黒人奴隷間にある一定の秩序、そして情報伝達経路があったことがあげられる。サンクト・クロイース島の西部中心地フレデリクステッズに、1848 年 7 月 2 日の夜から翌日朝までに 5,000～7,000 人の黒人奴隷が終結したが、際立った混乱はなく、ある一定の秩序が保たれていた。また、これだけの人数をプランター側に察知されること無く動員することが出来る情報伝達経路も存在したのであった。さらに､7 月 4 日以降も大きな混乱が見られず、特に白人側には危害が加えられなかった。これら一連の出来事のなかでよく、自由黒人であるブッド将軍 general Buddhoe の活躍、具体的には自由黒人と黒人奴隷間の仲立ち、さらに自由黒人と白人間の仲立ち、が取り上げられる。しかし、彼の行動は半ば伝説化した部分があり、今後裁判記録等を精査して再検討する必要があると思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0　件）

〔学会発表〕（計 1 件）
　2006 年 11 月 26 日、関学西洋史研究会第 9 回年次大会「中間報告：デンマーク領西インド諸島小史　－奴隷解放を中心に-」

〔図書〕（計 2 件）

　共著「ウィム・プランテーション博物館」（担当分：44-51 頁）、北米エスニシティ研究会（編）『北米の小さな博物館　２』彩流社、2009 年 3 月。

　共著「デンマークの海外進出」（担当分：171-175 頁）、村井誠人（編著）『デンマークを知るための 68 章』明石書店､2009 年 6 月。

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
**研究代表者**
**佐保　吉一（SAHO YOSHIKAZU）**
**東海大学・国際文化学部・教授**

(2)研究分担者

(3)連携研究者